

石坂宗哲の医学について

石原 武

江戸中後期に輩出された鍼科の名医、石坂宗哲はわが国の鍼灸史に特筆される存在の一人である。その理論には独特のものがあり、また終生鍼道発展に貢献した大変興味深い人物で、その医学観には独得のものがある。

彼とシーボルトとの交流などの事跡については、すでに呉秀三氏らの詳細な研究がなされている。ここでは宗哲の生涯を簡単に紹介し、彼の漢方に対する基本的な考え方がどのようなであったかについて考察を加えた。

石坂宗哲は近世の名医に挙げられている割にはその生涯に不明確な点も多いが、名を文和、字は廷玉といい、竿齋と号した。宗哲は通称である。彼は明和七年（一七七〇）に生まれ、寛政八年に幕府の命により甲府に赴き、のち甲府医学所を設立し、町医・官医の子弟に『難経』を講じたという。天保十二年（一八四一）に七十二歳で没した。晩

年に法眼を授位している。

宗哲の祖父は盲人で検校の位に進み、奥医師となった人であるが、鍼術を杉山和一に学び、その門下にあった。宗哲もその学統にあり杉山流を学んでいたが当時の風潮に刺激され、その学は少しずつ変化し始め、ついに独自の学説を樹立したのである。

彼の『内経』についての見解は、著書『医源』に、宗哲の女婿である石坂宗圭の序をみることによって伺い知ることができる。そこには、今の『素問』及び『靈枢』は古の素霊ではなく、後人がみだりに補添を加えたもので、その古義は僅かしかないといい、またよくこれを読む者でなければその定理は理解できないという。また『素問』『靈枢』『難経』から、元・明・蘭方の諸書に至るまで医の本質を求め、その後『内経』や『難経』を正し、努めて根拠のない誤った語を排除するよう述べている。

次に、宗哲の傷寒論観は『鍼灸広狭神俱集』の後序（同じく石坂宗圭の手になる）に見られる。それによると『傷寒論』『金匱要略』の二書は、張仲景が治療を当時に試み著したものであって誤法もあるが、文の質も高く、処方奇

幻・意味の妙悟は実際にこれらの法に従って治療する者でなければ語りがたいという。これらは実に医門の活書といふべきものであり、晋・唐以来の医書は皆これらの註脚であると誉める一方、今はただこれを尊崇するだけで是非を判別し、誤りの部分を正す者がないと、湯液の古方家の如く思わせるような記述がある。

また『医源』の本文に彼自身、『内経』及び『脈経』、『難経』の誤って書かれたものまでを信する者を偽者とし、その医学を偽医学と呼び、仲景の書のみを奉信して『内経』などの書を読んでも益がないと決めつけた古方家等、中でも東洞そして良山の説までも一人の私言者の学として、先の偽など者と共に信するに足らないと批判している。

宗哲自ら述べるには、医理は『素問』『靈枢』に、方は『傷寒論』に極まるという。著書『鍼灸説約』に見られる穴の位置、および主治には『素問』『靈枢』を始め、『甲乙経』『難経』『千金方』より引用され、主治の項には『傷寒論』からの抜萃もなされているのである。

彼の医学には蘭学の、ことに解剖学との関係を表わさなくてはならないが、著書の『内景備覧』に宗哲の解剖学観

が詳かに記されており、これには自らの学説と蘭学の解剖学を自己流に統合させようとした試みが察せられる。その所説は牽強附会、机上の空論が多かったと既に指摘されている。

石坂宗哲の医学、すなわち石坂流鍼術の極意とは、その基盤を『内経』におき、そこに『傷寒論』を加え、それら古義のみを捉え、かつ蘭方の解剖学を編入したものと考えられる。

従って彼は『内経』と『傷寒論』の内実を取捨し、漢蘭折衷した医学を鍼灸に取り入れようと試みた人物であったと位置づけられることができる。

(北里研究所付属東洋医学総合研究所)